施策評価シート

施策等名称	尖石縄文考古館の充実	体系番号	0201020104
		主管課	文化財課

1　施策基本情報

現状と課題	・地域を取り巻く社会環境は、急激な変化を遂げており、市民の学習要求の多様化・高度化に対応し、様々な地域課題や生活課題を解決するために、社会教育の重要性は高まっている。 ・更なる学習の充実を進め、「ひとづくり」を積極的に推進するとともに、地域・学校・行政の連携による推進体制の整備が望まれている。 ・学習ニーズを的確に把握し、市民の生涯にわたる自主的な学習活動が活性化するよう、様々な学習機会の提供や内容の充実、推進体制の整備が求められている。
めざす将来像（あるべき姿、基本的な考え方）	市内の考古学資料の収集・保存・調査研究の成果を展示・教育普及活動に活かし、縄文を意識したまちづくり・人づくりの基盤を整備し、後世に伝え引き継ぐことを目指す。

施策指標		指標名称	指標の説明（単位）	計画策定時	2022年度目標値 2027年度目標値
	①	年間入館者数	年間入館者数（人）	53,824	60,000 70,000
	②				
	③				

施策の体系

施策の柱1

名称	尖石縄文考古館の充実	主管課	文化財課
詳細	茅野市の縄文文化・史跡を知る中核的な施設として、研究者はもとより、幅広い層の方々が訪れる館を目指す。また、地域住民の学習支援や考古館活動への参加を支援する「参加・体験型」の施設を目指す。国宝「土偶」をはじめとする縄文遺産の常設展示、特定のテーマによる企画展示、特別史跡尖石遺跡の活用を目的とする史跡整備及び市内出土資料の修復等の資料整備、縄文教室や縄文ゼミナール等の講座、縄文文化研究に功績のあった業績を表彰する縄文文化賞により、実現していく。		

	まちづくりの目標指標	指標の説明（単位）	計画策定時	2022年度目標値 2027年度目標値
1	年間入館者数	年間入館者数（人）	53,824	60,000 70,000
2				
3				

	柱を構成する主要事務事業	区分
1	考古館運営事業	実施
2	考古館施設管理事業	実施
3	資料整備事業	実施
4	縄文教室事業	実施
5	特別展事業	実施
6	尖石縄文文化賞事業	実施

基本政策間連携

施策の柱2

名称		主管課	
詳細			

	まちづくりの目標指標	指標の説明（単位）	計画策定時	2022年度目標値 2027年度目標値
1				
2				
3				

	柱を構成する主要事務事業	区分
1		
2		
3		
4		
5		
6		

基本政策間連携

施策の柱3

名称		主管課	
詳細			

	まちづくりの目標指標	指標の説明（単位）	計画策定時	2022年度目標値 2027年度目標値
1				
2				
3				

	柱を構成する主要事務事業	区分
1		
2		
3		
4		
5		
6		

基本政策間連携

施策等名称	尖石縄文考古館の充実	体系番号	0201020104
		主管課	文化財課

2　指標等の推移と変動要因

体系区分		成果指標名	計画策定時	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
指標No.			中間目標値	実績値 ／ 達成率（実績値÷目標値）				
施策		年間入館者数	53,824	56,953	54,434	26,366	32,442	54,030
1			60,000	94.92	90.72	43.94	54.07	90.05
変動要因等	2018年度	前々年度比では3000人増であるが、前年度は八ヶ岳JOMONライフフェスティバル期間無料入館のため6000人ほど減少した。						
	2019年度	台風19号が直撃した10月の入館者数が前年度に比べ低下したため。						
	2020年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2か月間の休館等により入館者数が低下したため。						
	2021年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため1か月間の休館等により入館者数が低下したため。						
	2022年度	コロナ前の水準に戻ったが、なお学校利用が少なく目標値には届かなかった。						
柱1		年間入館者数	53,824	56,953	54,434	26,366	32,442	54,030
1			60,000	94.92	90.72	43.94	54.07	90.05
変動要因等	2018年度	前々年度比では3000人増であるが、前年度は八ヶ岳JOMONライフフェスティバル期間無料入館のため6000人ほど減少した。						
	2019年度	台風19号が直撃した10月の入館者数が前年度に比べ低下したため。						
	2020年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2か月間の休館等により入館者数が低下したため。						
	2021年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため1か月間の休館等により入館者数が低下したため。						
	2022年度	コロナ前の水準に戻ったが、なお学校利用が少なく目標値には届かなかった。						

施策等名称	尖石縄文考古館の充実	体系番号	0201020104
		主管課	文化財課

3　評価・改革改善　　（単位：円）

評価	項目		2018年（前年度比）		2019年（前年度比）		2020年（前年度比）		2021年（前年度比）		2022年（前年度比）	
	投資額	事業費(円)	82,498,252		78,672,258	0.95	69,451,834	0.88	156,518,713	2.25	87,039,750	0.56
		うち一財(円)	61,162,438		60,728,650	0.99	59,624,286	0.98	98,031,321	1.64	63,955,692	0.65
		増減理由（一般財源前年度比±10%以上の場合に記載）							特別史跡尖石石器時代遺蹟史跡等買い上げ事業（50273282円）、展示室照明LED化工事（6270000円）、テラス防水改修工事（11220000円）等による		特別史跡尖石石器時代遺跡史跡等買い上げ事業、展示室照明LED化工事、テラス改修工事等の分が減額	
	進捗評価		おおむね順調		おおむね順調		おおむね順調		おおむね順調		おおむね順調	
	総合評価	主な取組内容や成果	夏休み期間や大型連休中の臨時開館を含み年間310日開館、無料開館8日、企画展2回、来館者が参加できるイベント＝縄文教室10回、縄文ゼミナール7回、「識る」部会事業関連イベント2回を開催した。 国宝「土偶」や長野県宝の観覧とボランティアの解説や各種イベントは好評を博した。		夏休み期間や大型連休中の臨時開館を含み年間311日開館、無料開館7日、企画展1回、縄文教室9回、縄文文化大学講座1回、縄文ゼミナール4回、「識る」部会事業関連イベント2回を開催した。 国宝「土偶」、長野県宝の観覧とボランティアの解説、各種イベントも好評を博した。		新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、約2カ月の休館、臨時開館日及び無料開館日の取りやめ、感染リスクを評価したうえで体験型講座や展示解説を中止した。入館者数は半減したが、開館していること、また増設したパネルは来館者には好評だった。		展示ケース内照明をLED化し、雨水で傷んでいたテラスの改修工事を実施し、来館者の方々に快適に観覧いただけるようになった。また、史跡整備事業でも史跡追加指定を受けた民有地を公有地化した。新型コロナのために約1ヶ月の休館があったが、年間282日開館し、入館者数は前年比123%だった。		（R4・総括評価共通）夏休み期間や大型連休中の臨時開館を含み年間310日開館、無料開館1日、企画展1回、縄文教室7回及び作品焼き上げのための野焼き1回、縄文文化大学講座1回、縄文ゼミナール3回を開催、市民ガイド育成講座を11回を開催した。国宝「土偶」、長野県宝の観覧とボランティアの解説、各種イベントも好評を博した。	
		課題	各種イベントや企画展・特別展は好評ではあるが、年間の入館者数に直接的かつ劇的に効果が出ているわけではない。また、市民向けのイベントとオープン参加イベントに参加者数の差があり、参加要件の設定に課題がある。		企画展期間中の入館者数が増加するような内容を引き続き吟味する必要がある。 縄文教室も内容によって定員充足率に差があることが課題である。		今後も新型のウイルスや細菌等による感染症対策は避けられないことから、それらへの十分な対策を講じて、なるべく通常通り開館できるようにする（リスク評価の結果、閉館すべきであれば閉館する決断も必要）。		新型コロナウイルス感染症等の感染症対策として、入館時の対策だけでなく、既存イベントのうちオンラインで実施できる内容のものをオンラインで実施することや、ミュージアムショップのオンライン販売も課題となった。		（R4・総括評価共通）年間の入館者数と観覧料がコロナ前の水準に戻ったのは明るい材料で、この状況を維持できるように、各種イベントの内容吟味と実施、入館者への解説対応をできる限り対応するための市民ガイド育成を進めていく。	
改革・改善	改革・改善内容		入館者数のさらなる増加のため、①展示資料及び展示パネルの内容の再検討とそれに基づく変更、②企画展と連動したゼミナールや「識る」部会事業の実施、③縄文文化に関心のある層への広告戦略（「縄文ZINE」への広告掲載等）、等を進める。		好評を博している解説ボランティアの充実を図るなどして、入館者数を長期的に増加するようにしていく。また解説パネルを刷新してわかりやすく楽しく観覧できるようにする。		入館者に付き添っての解説案内はこうした状況下では難しいものの、これまで好評だった解説ボランティア（市民ガイド）の育成を引き続き優先的に進めていく。 また、体験学習も実施できる内容と方法を検討して、できるものを実施する。		市民ガイドを育成し館内外の解説要望に応えることができる体制や、縄文ゼミナールなどの講演型講座のオンライン開催ができる体制を整える。 また、新型コロナウイルス感染症等にもあまり左右されない短時間で楽しめる体験学習コンテンツを開発する。		市民ガイドは28人が修了した。この間も中ッ原縄文公園等について7回の解説要望に対応、また縄文ゼミナールを兼ねた特別史跡指定70周年記念シンポジウムのオンライン配信は開催当日で263人が視聴した。こうした取組をさらに進めていく。	
	施策の柱等の重点化	重点化する施策の柱	1		1		1		1		1	
		重点事務事業	1		1		1		1		1	
		理由	当館の入館者の来訪理由は国宝「土偶」を目的とした観覧であり、そのニーズに応えるためにも当館の十分な運営がまずもって必要となる。それが茅野市の縄文文化遺産の保全と教育普及にもつながる土台になると考える。		当館の入館者の来訪理由は国宝「土偶」を目的とした観覧であり、そのニーズに応えるためにも当館の十分な運営がまずもって必要となる。それが茅野市の縄文文化遺産の保全と教育普及にもつながる土台になると考える。		当館の入館者の来訪理由は国宝「土偶」を目的とした観覧であり、そのニーズに応えるためにも当館の十分な運営がまずもって必要となる。それが茅野市の縄文文化遺産の保全と教育普及にもつながる土台になると考える。		当館の入館者の来訪理由は国宝「土偶」を目的とした観覧であり、そのニーズに応えるためにも当館の十分な運営がまずもって必要となる。それが茅野市の縄文文化遺産の保全と教育普及にもつながる土台になると考える。		当館の入館者の来訪理由は国宝「土偶」を目的とした観覧であり、そのニーズに応えるためにも当館の十分な運営がまずもって必要となる。それが茅野市の縄文文化遺産の保全と教育普及にもつながる土台になると考える。	